

土屋 正義 編輯

繪本石山軍記

第三編

一

遠野
2269
21



八遠14
2269
21

繪本石山軍
記式編



功不可虛成

功不可虛成
不可以偽立

讀石山軍記而有感以錄古語



石山軍記三篇卷之

東本願寺第一世教如上人



かひ
吾をきき法
の
いせはけらし
業
幾
たのむ
少
筋

荒木攝津守村重

題信澄

帰
こころ
哀
青
閑人

織田七兵衛信澄



丹羽五郎左衛門長秀



悪漢 亦九郎

鈴木重幸旧僕
農夫権四郎

たれそむき
果て
あり
梅
の
玉
虫

石山軍巴三指巻

口ノ三



岐阜中納言秀信卿

石田治部少輔三成

い
ど
く
さ
ん
の
う
ら
は
し
ら
り
の
は
ら
け
り
の
さ
か
し
り
の
た
ら
し
り
の
つ
ら
し
り
の
ま
じ
ら
し
り

石山軍巴三指巻

征夷大將軍徳川家康公

東照宮御遺訓

人の一生の重荷を負ふ
速き路を行が如く急
ぐべし望み趣らば
困窮したる時の事を思
ひ出さば一譬は梅子
無き大木楠もある大
木こそ世ふ死達乃逸
まの衰ふも速うかる理
なる

繡像 四方玉堂画



織田ノ偏将 羽柴秀吉陣



繪本石山軍記第三編卷之一目録

- 荒木矢部の西使石山へ上使お立
並 御門主道俗を召て評定
- 重幸謀策小屈して霊夢を見らる
並 秀吉鈴木重幸へ書成送る





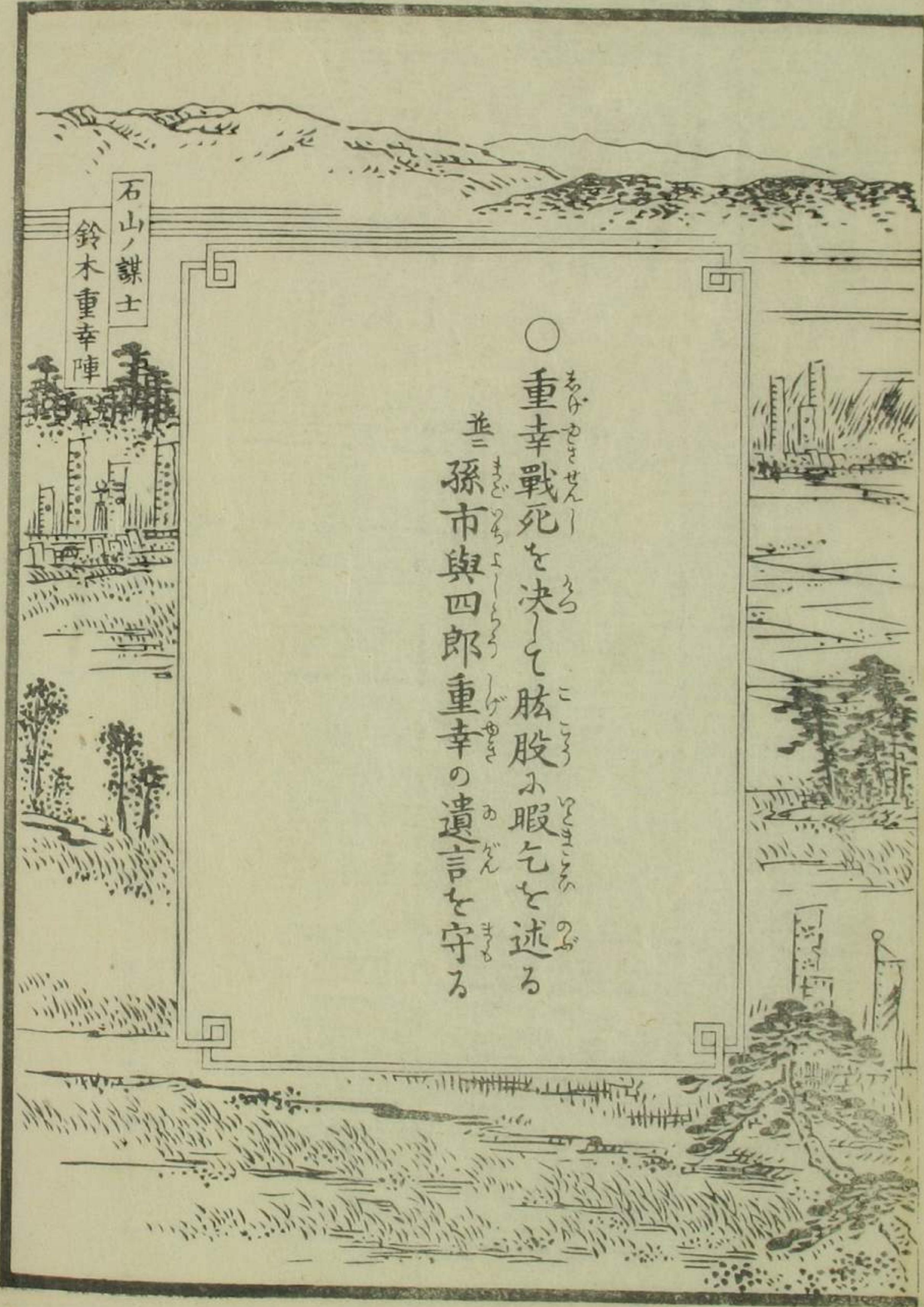
繪本石山軍記第三編卷之壹

浪速 土屋 正義 編輯

荒木矢部の兩士石山（上使小立并び）御門主道俗を召て評定

信長の上使荒木攝津守村重矢部善七郎の兩個ハ御門主頭如上人に
面謁して村重上意の趣き稟しけるハ數年織田と本願寺の兩家
何の趣意と云繚ろく鉾楯に速び兩家小相恨むべき條もなく多年
の合戦勝負を争ふ情介起原を考へ看れば去る年信長三好征伐の
為攝州天満の杜に在陣せし時當山より謀計を以て信長の諸陣出水
を以て浸溢せられ猥りに劍戟を振つゝ殺罰を行はる此を以て始め
て怨讐を作り兩家鬪諍の基を做起り素より釋門慈善教化の當山

石山軍記三編卷之壹



○重幸戦死を決して肱股小暇乞を述る
並ニ孫市與四郎重幸の遺言を守る

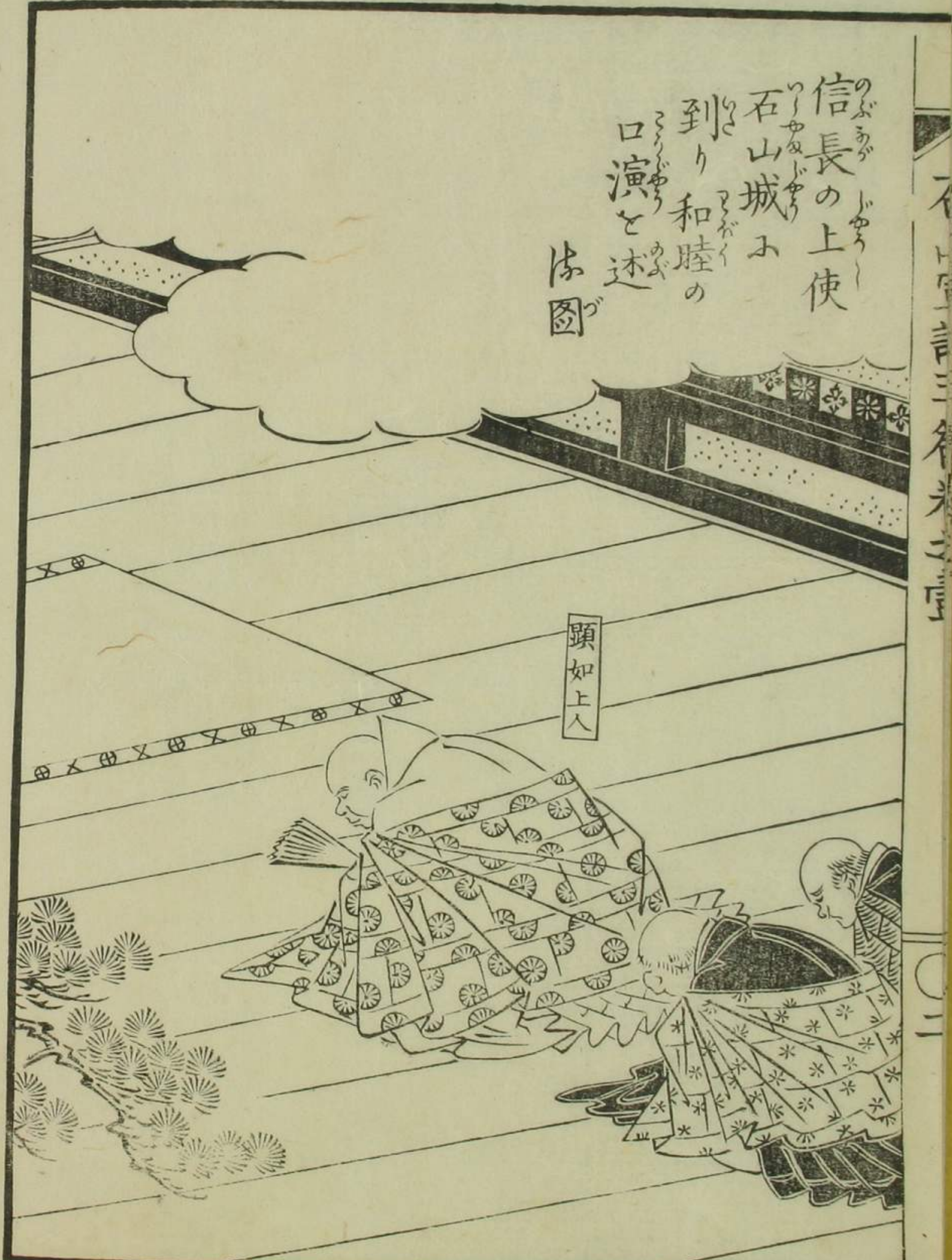
放生恕死を旨として諭す一心一向の念佛宗とて無罪の人畜命を屠ら
 せ赴意なき争戦に民を苦め後世を喻して修羅道に墮す是等宗祖
 の本意と思わねず實に不仁の甚きと謂べし私に思惟し信長ハ武
 家小生れ大小征伐を行ふを務として上ハ一天の君を安んず奉り下は万民
 の塗炭を救ひ罪を後世に得る共厭ふ繚々一唯本願寺上人は於るや奚
 ぞ夫俗人と同くも戦争修羅を恣に募らせ幾許の人命を損ハハ給ふ
 や俗諺に云佛憑で地獄に墮とら生壽を縮めて佛果に至るや信長未だ
 宗意ハ知ずと雖も恐らくハ佛の誓願小違はん是必ずしも近臣阿諛の
 暴令亦ハ門徒の輩驕慢に乗し上人の誠直を惑乱せしめ邪徒の宗に陷す
 企かりと茲を以て雙方年来の恨を散念し以来和睦を取結びて両家

水魚の交りを為ん上人心解て許容し給ふなれば當座の引出物として
 永々八木五万石を進し和泉河内兩國の内小於て二三郷の地を望しに任
 し永く寄附す繚々繚々違乱なく隨意に本寺建立有て當石山を開き
 給ふに於てハ先第一に朝庭への忠義万民の歡び何繚々之に如ん依て
 使者を以て微意を告る和平の熟答然るべからんと演舌滔々と水の流
 る如く理義明りに稟しこれハ頭如上人答へて曰ふ様信長の御仰殊勝
 の御繚々に覚候ふ貧道僧の躬として争鬪諍を好み天下の擾乱を歡バ
 んや素より郡國と争ふ軍に非らず中興蓮師草創の禁利開轉すべき
 命よりして信長の御所望に悖るを以て竟にハ軍馬を差向らふ依之
 當宗旨断滅を悲し止事を得ず防戦に速べり使者の方々にハ暫時

石山城の御殿



石山城の御殿



信長の上使
石山城へ
到り和睦の
口演と述
は図

頭如上人

の間客殿に在り休息し給へ門下の道俗と相議をなす。臆て返答稟すべしと仰せらる。内使ハ御尤もに候ふと云て介儘休息して相待居れ。巴山海の珍味を列ねし酒飯饗應最も丁寧小竭さる。徳て上人の家老下間を始め籠城の末寺門下の軍將を集め信長使節の趣きと告て是非の評議小速び給ふ時に下間法橋頼龍席進み出て稟しけり。ハ信長稟し越る口演の趣き一應ハ慈愛含める様聞ゆまじと反覆定らざる不實の大將輕卒に當城を御開き有緝努々御無用に存し奉り候ふ。介先前例を稟する時ハ朝倉淺井と誓書の和睦し天聽の叡慮の程も憚らず忽ち兩家と討滅亡して其國郡を奪ひ取心立なき。實ハ虎狼ノ等き慙忍なり別して淺井長政ハ妹婿なり親族の間より斯

の如く況て當山ハ數年の怨敵唇に糖館を味ハす者ハ極めて其心胸毒有と云り然れハ此使節の趣きとて信長の心底訝き緝限をなす。愚臣に於てハ御開城の儀決して有べし存し候ふと詞を放つて止めり。ま軍師重幸之と聴て法橋の仰せ至極の賢察信長の胸中前例に顯れし渠百計百戰施す。雖も毎度兵卒損込而已は利軍を得る緝なき上毛利家より糧米入しを以て弥其儘捨置ぐと思ひ和睦と云出開城を不意と討べき塊膽なり。其疾より推察仕りぬ。重幸兩眼閉ざるうちハ尚幾許の年を累ね攻戰なす共得こそ當城落さるべきやハ和睦を計るは信長に利ありて當寺に於てハ甚だ不利かり遠慮なく不承知の條仰せ出され使者を追歸し給ふべし。信長

怒つて大軍を發し押寄たる是亦望む所の決戦とて某頃日一計策
と田一置ぬ渠の軍勢粉の如く打碎き機に乗る信長を討課
せ佛敵法敵の根を断ん緯も亦難き所為と有べくばと諾大丈夫小
言上せし一座の末寺門徒の軍將倍々英氣一同して勇を悦び
竟に評議ハ一決せし上人ハ下間法眼頼廉に仰せて織田の兩
使へ返答し給ふ様も信長の御心底の程承はり誠小感激少ながら
ず候ふ法師の躬を以て公に敵對争の闘諍を好まざる稟さんや和睦の儀
固より願ふ所又候ふ然しなから數年相挑む起原ハ當寺より謂ふ
く敵すに非ず先刻門主の稟さる通り信長當寺の境地を望まら蓮
師佛勅を蒙る靈場ゆへ只顧開轉の儀を辞退候ふより信長三好誅

伐を楯とて摂陽小軍馬を入給ふハ實ハ是當寺を攻潰すをき
結構なり然バ宗恩を感ずる門葉の徒を公をきとて法敵佛敵と称
ト竟に數年の闘戦とは成りぬ是皆當寺を移轉すまじき為今以て
境内を捧げ稟すべき緯を相成稟すまじきにて候ふ當寺小於てハ
此儘小差置れ和議相調ふべき儀小候る委細尊命に従ひ稟す
くと頼廉を以て田答有しかバ兩使此趣を聞て詮方なく直ち小石
山城を退出して江州安土へこそハ歸りけり
重辛謀策に屈して靈夢を見る并び秀吉鈴木重幸ハ書を送る
去る程小石山の城中に信長此方の返答を聞かぬ怒つて大軍を
引率し攻来るべきハ必定なん介準備を肝要なりとて鐵を研

き鳥銃の筒と接へ各士今や奇るくも懸りけり就中軍師鈴
木重幸ハ帷幕の裡小謀略を凝し此上の戦争こそ我生涯の浮沈決
着の大事なる天晴奇異の妙策を施し目覺しき大戦を行ひ信長
父子を手苛く懲しむるの倘くハ運に乗れと討取を永く宗門の障
魔を除人物と寝食を忘れ子舎に引蟄り數軍慮を回し在ける
が案に倚係りながら心神勞れて思はず睡眠する夢幻もあく其
容端正なる僧一個忽然と立顯されて傍に寄一枚の短冊を右手に
携へ重幸が案の向ふに安然と座して六字名號を唱へて動く繚ま
し重幸熟這僧の面貌を視るに當山本堂に安置し奉る高祖親鸞
聖人の尊像小寸分違えぬ面影なれば重幸思はず頓首拜禮なり

ぬ彼僧手に持する短冊とバ重幸の掌に遞與て唱名を止め汝
此歌の心を知れるやと云重幸夢心に短冊を取上見れば
取上川人を下せ稻ぶぬのかかりて沈むりのととまきけ
と上代の手をて書とり重幸奇異の思ひをなして僧の出所法
號問んとする時忽然とて重幸を搖覚す者あり重幸眼を開
きく之を省れ下間少進仲之小ぞ有ける重幸夢幻の際を辨
ぜば先禮をなして問て曰く法橋是ハ如何なる繚の候ふて深夜俺
弊屋に來臨在り哉仲之答て推參失敬御許し給へう今日江
州の門徒より注進あり信長當寺の返答を憤り不日に大軍を引卒
なして石山城を微塵小攻潰さずんば師を凱さして諸將へ令し

幾内東山海北陸速比播兩丹紀の兵を合併し一勢凡卅余万人にて
 押出す由稟し来りぬ依て今日城中の諸門葉御門主の御前に集會
 して大事の評議軍師を召給へと衆人頗に稟し上しり共上人頃日
 軍師の不豫を憚られ信長大軍を以て押寄る緯素より期し難
 事なれば更め惑聽すべき儀にも非ず無益の評定小軍師の煩慮
 を尚傷し然んハ心方こそ深く御斟酌あせらるを以て諸門葉等
 打寄合つ云云評論に速ぶと雖も大敵防禦の手段不到れ争
 凡尋の才勘に防ぐべきやハ毛を吹瘻を索むハ必定故に今日の集會
 ハ借止より某暗に推参仕る處ハ軍師の確計を問詮め御門主の御
 心を安めん為押入室謝するに詞なし重幸莞尔と笑ひし稟し

けるは寡を以衆を討ハ軍の效ハ人勢の速バざるに到る時を水
 火の二個を遣ふて敵を討是世々兵家の必用の物とす仮令信長天下
 の大兵を集ち一時小攻崩さんと操立る共俺亦水火の秘計を施し
 衆敵を塵殺せんの謀計設り然共茲に奇異の一事ありて俺存心
 卒に一決せば今宵那緯を商議すとも益なき明日御前より出て事
 言上せん法橋も先宿所へ御歸り有て打攬ぎて寝給へうと云依
 之仲之此ハ心安んト暇を告て出て行を重幸陣外まで者送り出再び
 案に倚懸りて夢の裡の歌の意を按ト察るに忽心眼蒙臆として胸
 痛く水落迫りて忍難く急小人を呼て自ら薬法を立良劑調合し
 て下僕小旨令烈火に懸て沸煎せり一連に二帖を服用するに良胸

痛忘るるに似たりも雖も頭に快復の驗も着へず自是病着の枕を
傾けしるるも備も亦羽柴筑前守秀吉ハ田原下旬安土に参上し越年
迄て君前に伺候し有ける信長公ハ石山と和睦の使命頭如上人
令承有ざるを以て信長日來の憤怒十倍して屬國の諸軍兵を驅集
め大軍にて石山に向ふ催しなり秀吉斯と着るより眉を頻り當時
諸國の強敵過半不服なり然るに不可坊主を相敵として軍馬を
動し國費を厭はず万民無益の歩役に宛る緯是君將の好む所
非ざるん如何もしと俺諫め奉り御進發を止め奉らんと主君の御前
に出て稟しけるハ某頃日當御城に有て容子を承はり候ふ本願
寺上意不服の返答我君御憤り御最も至極寛大の上命相背くの

條如何も輕蔑の行状恕すべし片時も誅伐然るべく候ふと云
信長公打笑つ曰ふ様ハ予如何ぞ是を棄置ざらんや汝ハ此緯談合
んと思ひしが是逆數度諫め止りしを以て亦もや強諫をすべく願ひ
今日まで何共口外なき予今般ハ石山に進發せし頭如父子が首級
討ざんハ誓て師を凱すまじと思ひ東山東北陸の軍勢を聚め速
到着の武士も數くらず近々大軍を將ひて石山を踏崩し積年の鬱
憤思ひ知すべきなり汝も亦供すべしと仰られしを秀吉謹んで答
へ稟す様仰せしや速に稟すべき君恥し絶らる則ハ臣死すところ則
ち愚臣先鋒を承はり一番に坊主首を引提て御上覽し入奉るべき
かり併しなから愚意を以て按卜者れ僅し石山ハ澱川小添孤城に

重幸
靈夢
感
死と決
ま
図



て別小之と云援兵もななく亦籠城をせる輩と謂は或ひハ法師浮浪
 人の類ひ或ひを堅門徒の農民們墓々々き武士迎ハ居候ふまじ泰な
 らも我君武將の御躬とて諸國の軍兵を集卒有て御征伐ハ最勿
 射ち君直々の御進發御陣ハ大國の強敵退治不在べき繚君暫
 く御出馬を止めさせられ愚臣秀吉小仰せ付られ候ハ要害能石山
 の城より共攻落すに難き繚候ハト愚臣聊存ト倚の計畧候ハ繚
 仕課セ後征伐有とも敢て遅き繚候も候ふまじと掌に採る如く
 言上せしるバ信長公ハ秀吉の器量知一召共尚根を押し問給ふ様
 ハ汝如何なる謀畧を思ひ設け數年持飽倦一石山を拔哉秀吉答
 へて稟一ける様医家の病根を拔ハ精劑小有介反する諸毒を治

療セバ全躰泰然と本に復すべ一今石山の敵徒も右の如く軍を勧
 むる病根に除げ堅く伏ふと我君の御心任せは大軍を動かさず
 して敵を傷める一固の心策なり愚臣前年京都小留り御目代を
 勉めしりし時數回石山城中に往返して頭如上人の介天稟を知り性
 質温順柔和にして慈愛深く流石一宗の棟梁と看へて俗意を離れ
 知識方りたるを全然を全く數年の闘戦も門主頭如が計ひにてななく
 皆鈴木源左衛門重幸と謂る一個の浪士が軍配の所為なり此浪士出所
 将来を聴糾一着るに紀州海部郡藤代山社下に零落して幽居なりん
 ふが朝三暮四の計策に迫り幼童手跡素讀を營々とし且ハ医術を兼
 て過ぐる折より我君本願寺と不平を聴出まじり究竟の時節なりと

思へばや一向宗門の信者も虚謀頭如下間主従を勸め武家を謾り
兵馬を扱ひ數年の拒戦言語同断かり情重幸が所存を慮るに勢を
得て勝利全く子孫に富貴の榮を遺すべく倘打負て落城に逮ぶと
も頭如一個の損失にして重幸が躬に預る所小非ず既小渠石山城に
楯籠りて軍を操る繚九箇年の間頭如を誑惑して國民を害す實
に不敵の癖者に候ふ依て渠勝も利なり負るも利なりを兩端の惡
心を狭く忠義と着せ頭如主從小尊敬受て國家の大事を顧る
條唯名聞利欲を索めん而已故に愚臣の存する方便ハ先談鈴木重
幸を釣出して如何も謀つて討課せなば早石山城ハ掌中に有但
軍界ハ時の機變に隨ハば茲に決着の議言上ハ難く頓て勝軍

訴へ候ふ後具に言上なり奉らん諾潔よく稟一けきバ信長公
之を聞せ給ひ今に始め汝が論隨意に出陣致すべしとて即時
に六千余騎の逞兵を與へ公にハ進發を差控へ給ふ備自是先の中將
信忠卿ハ石山征伐の総大将として令弟北畠信雄朝臣神戸信孝朝
臣織田上野介信包津田源三郎勝長惟住五郎左衛門尉長秀瀧川
左近將監一益峰谷兵庫頭頼隆惟任日向守光秀等を軍將として尾
濃江若介餘幾内の兵を催し総勢都合六万余騎として石山城へ向ハき
一が共鈴木重幸種々奇策を設け寄手毎度の敗走に逮び一度も仕附
し合戦なく却て夜襲朝懸を受たど一弥持飽倦する形勢たるは
長蛇の如く陣取列ねて四面遠巻に取圍つ合戦の次第一伍一什安土

一注進有るゆへに信長思慮して前の如く和睦の謀計云入給へど
本願寺更に従ふ繚なく信長も百計盡て御坐し所へ羽柴秀吉忠言
と述て右の如く容易諾ひ奉りしかぞ秀吉ならで八夜八明ト迎早速
信忠卿へ上使を立られ並び諸軍將へ仰せ含めらる様ハ予今般別に
存ずる旨有て羽柴秀吉余地へ出張せむ万端秀吉が相議に就く差
圖に應へ戦ひを援け軍忠を勵むごとの上命なり信忠卿始り其余
の諸軍將僉謹んで鉤命を承る恁りし程に羽柴筑前守秀吉も手
勢六千余騎を引卒し摂州島上郡芥川まで出張せらる干時天正六年戊
寅二月石山の軍師鈴木源左衛門尉重幸ハ數年心氣を勞せ故にや
胸膈痛し飲食進まず時とて血を吐く繚凡かたば治療頻に驗無り

一かば顯如上人深く心を傷ませし重幸が病牀に訪来給ひ懇に
余容態を問せしれ色々神樂良劑與へ給ふ重幸殆ど感涙に咽び死を
以て此恩報ト奉らんと後ハ唱名より外詞もなき斯る折し一卒馳
来りて敵將羽柴筑前守より書を軍師の許へ捧呈せりとて一封の書
状を差出し々々重幸聽て眉を顰めつ秀吉稟し越す所那繚々
んと封を切て讀文言に曰く
一別後良對面を得ず御無事欣悦致し候ふ此度主人 内府公石
山城中の計議を憤り諸國の軍兵四十萬を驅集め抑 内府ハ天下の
武將方り一度怒る則ハ堅城を崩し強國を止ま是所謂 勅命を頭
に戴く方り足下兵法軍畧に於てハ人に譲らざと雖も何ぞ

勅命を犯し、武将の威を拒まんや、終に八宗門破滅の基より、足
下智術を盡し、宗門を助るに似て却て宗門を滅する者なり、況や
又世を乱し、民を苦め、豈能佛意を得者と、言ん乎、故に今、内府公
足下を怒て、本願寺を怒ず、足下を殺さんと欲し、本願寺を盡さ
んと欲せば、是足下有を以て能敵をなすが為なり、諺に曰、高木風
に折き、楊梢雪小折れず、足下在ざるに於て、本願寺ハ全し、實宗
門も重んじ、忠節を盡すの心有れば、城を出て潔白戦死を遂べり、多言
を竭す、照察を希のま

天正六年二月廿日

鈴木源左衛門殿

羽柴筑前守秀吉

重幸戦死を決して、肱股に服乞を伸り、孫市與四郎重幸の遺言を守
重幸書を讀終つ、慚愧し、忍ず、數長嘆して居り、如何様世
に我失、人が視る、秀吉我罪を算ふ所、悉く理に的當して、非なる、緯
な、俺素より是を憚る心有ども、信長及覆の奸曲の心を懐き、親疎と
も、欺計で退轉せしむ、是を顧ふを以て、數戦小進べり、然れ共、秀吉の
詞の如く、俺今般悔悟して、戦死を志す、バ、忍ち、本願寺に謀士なき、則は
信長却て上人を愍まん乎、併平ぐ心、緩されぬ、信長たり、勝手憑きは、尚
心元を、一借如何かして、可なるべきと思ひ、勞ひて、卧居たり、一が誘ふ、
如く、睡眠を生して、少選打睡める、夢心に、前々夢見し、一個の老僧、同ト
容に立頭、と、重幸の枕邊に、歩行寄再び、和歌一首を示り、給し、重幸

掌に拿て頂戴きやを讀下灰介哥に

世を治め民を助る心を頼て御法の真たりたり

と吟ド早ぬ時春風吹入身動き共に夢ハ覺果小々り重幸殊に奇夢

を感ドつ恍惚とて心酔るが如く手を拱きて考へ首れバ前夜机小

倚係り夢見一歌ハ彼後撰集に入られざる宛然グ詠了ぬる和哥に

一々世に謀計を以て人を欺き亦人を困苦窮迫なきむる者ハ却て己

グ躬を損ふ緯を識しむ今の一書ハ續古今集に撰入し世を静め民を

安んず志の者ハ則ち真の佛者なり中勢郷の詠ト給へる和哥なり

今や是秀吉が送る書通と暗合せる意も太不思議かり正しく高祖

聖人殺伐を悲まれ俺愚見を善導一歎味方を恤と造悪業障洗除

せ一免且宗門永文を計り給ふ廣大無量の佛慮をうづべ一と茲小

始めて迷蒙の雲開け真如實相の月拜する心地一胸膈の苦痛を

忽ち忘る闊然と平日に快復せ一かバ愈六字の尊号有難く方徳圓

満の寶號ぞと感銘なしてぞ歡をれり諸石山城中の衆人にハ信長

憤發せば大軍を卒一發向すべきと思ひ居るに羽柴秀吉緯なる

軍勢にて芥川に屯集せしと聞より城中の將卒們大きに嘲笑ひきし

も強勢短慮の信長も攻戦手出一の知畧に盡果果敢一き大軍も得

差向す刺へ自ら出馬も為ざり容子ハ能々物懲せ一緯もあらん此

上ハ恐るに足ざり勇まらるるを重幸聴て嚴しく制止し信長羽柴に令

して出張せしむハ城中の者介意知所ハ非ず殊に秀吉等閑の敵ハ非

ず愈堅固小城守護べきなり寄手遠巻く々々儘閣々々味方の進退
動搖に依て寄手惣懸りにせん手積かり重幸別に思ふ所の旨趣有
バ小野原清水の邊に出張し秀吉と一擧の雌雄を決すべし管す猥小
討出べからば城諸將一統一稟一度一厥ち上人の御前に罷り出
小野原出張の次第を言上し心裡一唯今生の御暇乞と上人の尊面を
屢頂拜し夫と夫無に死後の計策など密に細々と稟し上つ余波情く
も御前を退出し急ぎ進發の準備小速びく々々恁て孫市與四郎を招
き重幸暗に語つ稟しけるハ汝達を始り本國雜賀の一黨年來俺小
隨從して忠戦の働き欣悦の至り何緯の是に如ん此上弥戦功を盡し
て當宗不退轉の計畧を々々面々躬の勤めを々々勵まらるべきなり某明日

當國小野原へ出張し敵羽柴筑前守と對戦し快く陣没を遂ん
と欲ふなり御門主を始り城中の諸將達必忠諫め止むべきを察し
某曾て緯と語らず雖も汝們兩個ハ我腹心ゆへに今余決心の旨を
具に告人將死後の計策を遺託せん為情信長の形勢を看るに朝
廷の補佐し勅命を稱し威に乗し諸國を征するに食暫くハ拒戦
に違ふと雖も終る滅びせむと云者なり時世の變革榮枯窮達官
職内大臣右大将と昇進し武將と仰げ信長を以て尚も怨敵と
戦ふとき渠が憤念倍々擲が如く勿躰たなくも宗門退轉すべく是皆
重幸が軍配の罪と考り却て宗法を重んじ宗門を以て豈余失罪
恐れ戦りぎんや永劫墮獄の呵責想像べし依て深く勘考し一宗

永績を計れど重幸一戦の中に死を極め上人の安泰を慮るに如べ
 からば此上猶俺籠城して敵する則ハ尙勿躰無も開山聖人の法徳に
 朝敵の汚名を被むらさば百戦百勝をす共何の益たゞ第一高祖對し
 奉り大不忠かり然れバ重幸の忠戦と思ふ軍ハ却て當石山の要害と
 成て信長の怨憎強き時ハ極めて介根を断て葉を枯さん是皆俺一心
 より起すべ一實に顧へば恐るべき繚なり諺に出る杭うさるる云喻
 あり信長悪む者ハ重幸を目指せり俺軍門を出て陣没なきバ信長
 の怒氣其半を解んら繚更り一云繚ニあれど此光陰の數度戦争の
 旨趣ハ國郡を爭ふ鬪諍一も非ず佛地換轉を違背ある而已故一一日
 合戦を止まるる則ハ人命救ふ功德幾許ぞ私の心を棄て徳行を積善

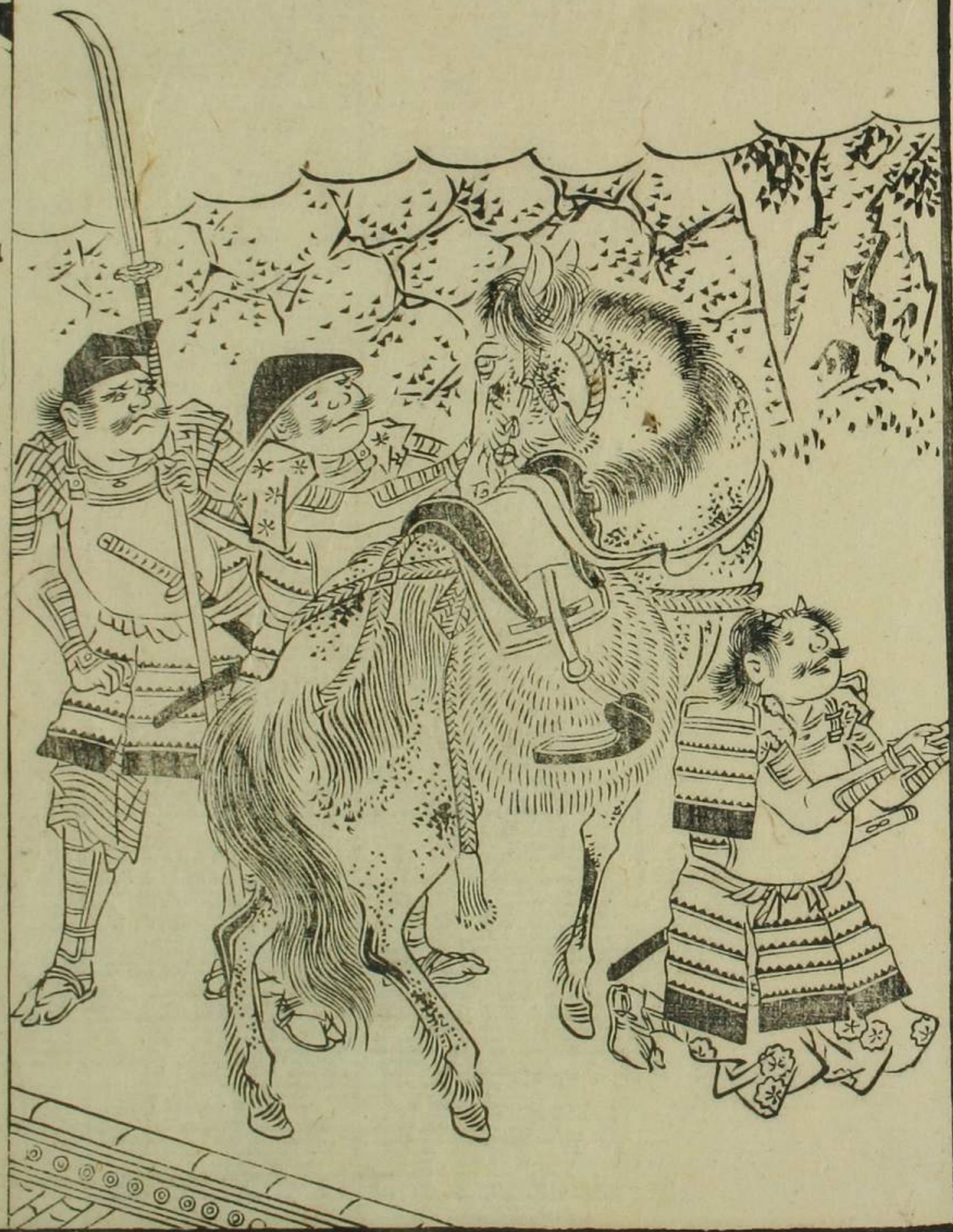
事を努めて施す時ハ必ず諸佛諸天の加護を蒙り窮厄難戰遁る
 べきかり尙信長小虚謀を設けて上人御父子を害せんと計らバ逸く
 俺藤代の山中へ供奉一如何もして危急を助け奉れ是介到底の退口
 を云置く然れ當城ハ無雙の要害なり翌にも俺陣没なりより逆能心
 緒丹田に落し着て猶も籠城を堅く相護り管ずるも出兵一々戦ふ
 繚勿れ尙信長不意に押寄来つて防禦の方策如何と思はれ俺未だ用
 ひざる所の妙計數り條筆記して緘書となし是這筈に藏置ぬきバ汝
 們兩個熟讀して要に立上強ち勝利の戦争索めんとせむ信長退軍せ
 ば曰小倚て追討伏兵等致すべからば此遺旨最愚に似たりと雖も禽の
 死んとする則介聲悲しく人の死んと為る則介言可とぞ夫故を懐小

は皆言行なり是ぞ最期の別きなるぞと土器を奪て兩個小與一り
まをへちよし 孫市與四郎驚き顛倒して胸塞りて即答も出兼唯聲を吞て低き
かき 泣し漸有て與四郎面を上測ざる軍師御覺悟の旨趣斯御遺言の
まをへちよし 仰の條々謹んで拜承仕りて候小併一統盲人の杖を失ふ如く勇氣を
かき 折り一楯小離水バ長く籠城の程も覺束なり軍師御賢慮定免給
まをへちよし 不上ハ某奈何制り票たり共採用有べくハ存ト候ハ併ながら御
かき 門主を始り参らせ當城中の上下六万余人今日迄信長の大敵を恐れざ
まをへちよし るハ軍師一個御座を以たり今尙陣没なり給ふときハ城中ハ闇夜小
かき 火を失ふ如く敵ハ十分の吉事を示すが如く且慙忍なる信長の生質
まをへちよし 軍師一個を討取りりて何條本願寺に宥免加へん哉倍々急に攻詰

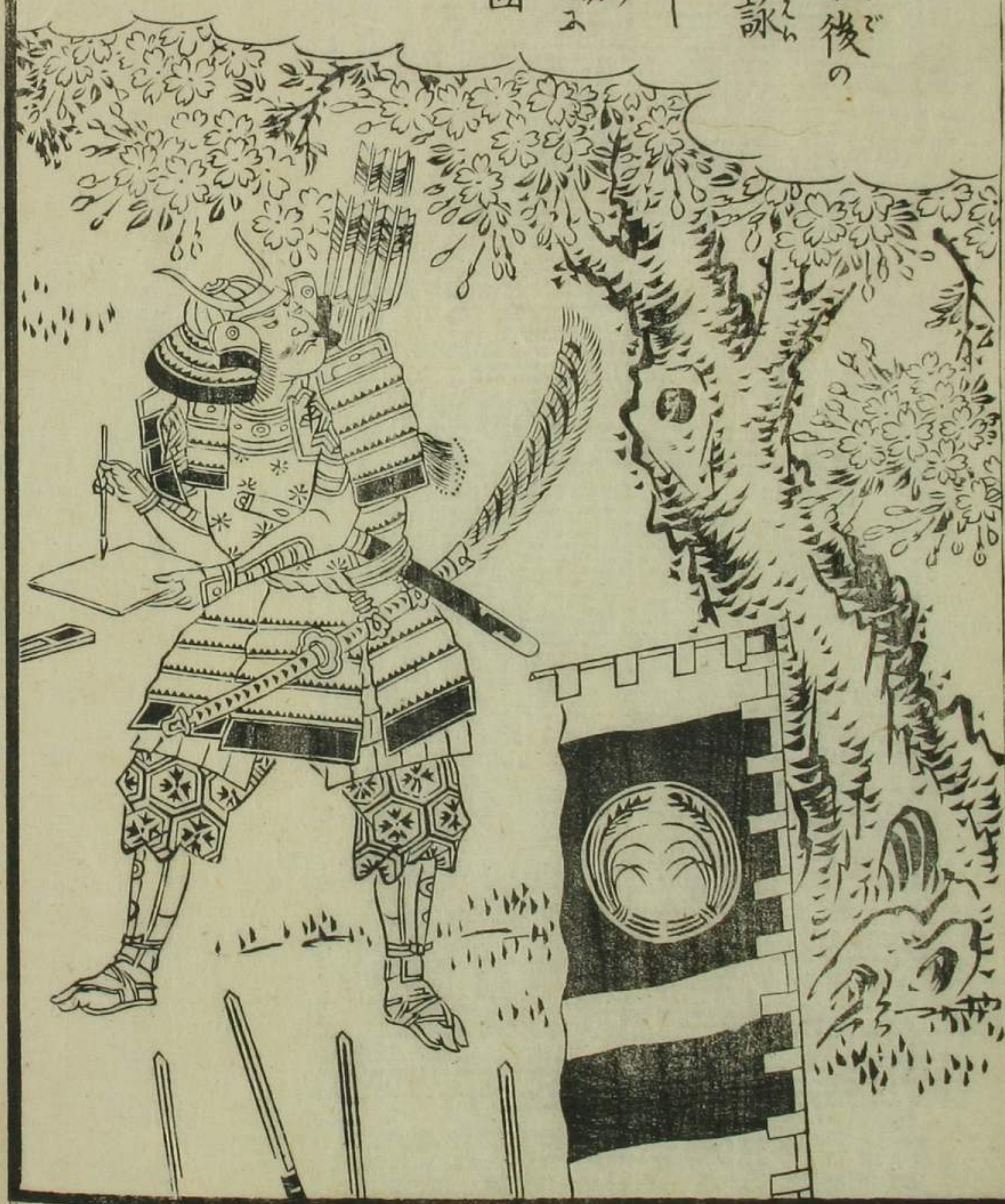
来つ臨ん落城を俟小等く生ハ難く死ハ易き中にも萬卒も
かき 換難き御躬を唯御自分の御心より以て忌ハき儀を命せ出さるは
まをへちよし 軍師千慮の一失なるにや今一應御賢慮を廻らせられ城中上下安心仕
かき つる様の御思念有間欲候ふと云孫市も俱小諫めて曰様夫軍師の
まをへちよし 戦場小陣没と云ハ城傾き生路を失ふ時の緯なり今兵糧に不足なく
かき 矢玉盡す六万余人の勢兵を屬へ已に九箇年籠城し給ひながら宗門
まをへちよし 興廢の一定も省給さば御門主の御歎きも思し召ねず季の水續而
かき 已計り給ふ共夫ハ迂遠き御分別に候へ當時信長の大敵め為宗門
まをへちよし 浮沈の際小臨して生死盟を俟ぬ不定の世界深慮も程過てハ如何
かき に候へ万乞再應賢考願ハ候ふと兩個詞を竭して諫められ

共重幸頭を左右に打振俺此後とも軍配を主らば猶勝利の闘
諍易らるべし併那緯に依ず物緯時あり人の生死も是亦時あり
俺頃目奇異の靈夢を蒙り己に世を辞すは時を察ぬ正しく高祖聖
人直々の示現なり殊に二首の和歌を感得し余意を情感吟して音る
に俺所為の軍畧を謂ハ欺謀暴殺一箇として真宗教化の弘法に
逆ハ積悪無量の罪を作りて宗法立人と相戦ふ緯如来の誓願に外
れたりと始めて心に懺愧せしむ物も始有る終有るを輪廻應報の造
罪も恐れず采を振て人命を害ふを佛の御為と心得とるは却て宗
旨破滅の基を作しと轉煩悶して在し所へ羽柴筑前守秀吉小野
原より書を送りて我出陣を促す余書の文辞高祖の示現に授け給

へる両哥の意味と宛も符節を合すが如し茲に到て蒙臆しる
心の霧開け時を外さば催促小應トて小野原に出張して一戦を遂潔
白陣没をかきんと決心す非除亦俺此儘存命なす共信長日本半
州の軍勢を以て諸流の水の手堰留なんどし城中渴水する時を量
り尚火攻の方策を行ふならば一朝ふして城廓灰土とせしめん殊
此羽柴筑前守秀吉と云ハ英才日月の隈なく輝く如し俺們乃智
術ハ螢火一等く何を以てう之に敵對すべき加之此秀吉が躬にハ天の
擁護と地の應あり常に陣上に祥雲靉靄瑞星現ず今天下交々亂
るも雖も終小天下を掌握せん者ハ秀吉にこそと目監し然ハ秀吉
と戦陣なりて忠節の陣没を潔くしげ渠が心を感動せしめんこそ本



重幸最後の
出陣小詠
歌とあり
戰場
趣く
圖



願寺永父の謀畧なり悪く狐疑せば大患生れ却て石山城廓保
ち難く上人御安堵成すまじけまば俺心最早撓む緋な一再度停むる
緋勿れと云茲に於て兩個詮方もなく授與せられざる兵書の緋冊
是ぞ孔明が錦囊の計策なり紀念の賜物辱しめて恭しく兩個の間
へ請納め更に別離の酒宴を始め暫く時をぞ移し有りか諸も鈴木
源左衛門尉重幸八孫市郎與四郎の兩個と別離の酒宴を催し
が逸拂曉小近づきぬまを重幸出立の準備をなし先陣八根来の小
密茶法師なり選兵三百余人を引隨し中陣八大将重幸五百余
人孫市郎與四郎の兩個も八重幸微細に計策を授け二百余人を
後陣小備へ都合其勢一千余人威氣凜々として出立し速ぶ今日

を限りの戦かまを重代持傳なる町の鎧卯の花威し黄に轉し
たるを草摺長に着下しつて兜整頭の胃を居首小着たり赤銅
作りの花笈と号けし太刀に熊の鞆小收しを帯て馬牽寄つ乗
んとすれば逸四面の天白く渡り櫻の樹間小轉る鶯の音も最花
やうに聞ゆるにぞ重幸少刻立留りて盛花の樹間を打着遣つ
矢立の毫を拿出して帖紙にさらさらとして書下せり
是やらの愁世の外の花の扉の曉のそら
と詠つて馬に閃りと打跨りつ徐々城戸口歩行ませ出一千余人の
兵前駆後従し小野原さして出陣たりけり維時天正六年二月廿八日
なり石山勢僅に一千余騎して同國島下郡小野原清水に
小野原清
水郡山の

近所あり芥川より二里余を隔てり最も澁川筋陣を取秀吉が芥川の陣
より北へ遠く隔つ併原木の傍に出して之を改す
所へ書を送る秀吉是を省て心小打笑逸くも鈴木が覺悟を曉察し
返書を送つて芥川を打踰重幸が陣より廿余町隔り下居と云地り
陣を進り此時三位中将信忠卿ハ石山を遠巻りて在りたるが羽
柴鈴木對陣の由聽し召れ惟任日向守光秀惟任五郎左衛門尉長
秀等を引具し其勢一万三千余騎とて秀吉が陣せし芥川迄出張し
軍威を輝し戦を援んと控給ふ去程小羽柴鈴木の兩勢ハ互に陣を
押出りつ矢頃近く成り程小双方鯨波を上り等しく一備の鳥銃
を撃出す緯繁く炮烟の下より突出るに鎗塩や宜り人早減と合瘞
まず去に戦ひくも重幸が先陣ハ石山城中とて殊に勇名の聞へ高

き根来の剛僧小密茶法師逞兵三百余騎を鷹行小立て自ら真先
に馬を跳らせ例の八角棒をまうくと打振羽柴が先陣中村孫平次一
氏堀尾茂助吉晴が七百余騎の其中へ韋駄天の暴る如く喚き蒐入更
に人馬の嫌ひもたぐ破落離くと打薙程に或ハ頭を胸中へ打込れ
或ハ中天に擲き上られ力に乗せし介悪戦小誰ハ此法師小羽向
ふづき中村堀尾が隊崩きて思はば兩陣共三丁計り友雪顔して引退
けハ是を着るより中軍に控り大將重幸五百余人を真丸一隊へ
小密茶が戦ひを左に着て秀吉の本陣へ討入んと真一文字に突て懸
れハ羽柴の勇臣淺野弥兵衛長政蜂須賀彦右衛門正勝小寺官兵左
孝高等一千余人左右より懸合せ重幸の中に取込漏さどとて双方

鐵花を散して戦ふより重幸原来万夫不當の勇有ハ總の徑り三尺餘
の鎗を取電光雲間小見く如く振立五百余人の從卒の者を四股の如く
に進退せしめ其容の烈しき輝天魔に似たり羽柴の軍兵們恐怖き威に
呑りく進み得ざれば蜂須賀小寺の兩將ハ炮術組の兵卒前に出
百挺の鳥銃聯發せしり石山勢些しき素より着ゆる所を淺野蜂須
賀小寺の輩透間もたゞ鎗を突入捲り崩さんと操どりける重幸是
と着て大きに怒り俺秀吉と勝負を決せんとい出張なりとる今日の
戦汝們道を塞ぐると太奇怪かり腕立なきバ死人の丘築秀吉諸共
死出三途の首途刀の引導望んといやと呼たりたから馬跳らせし
群る敵中に刻入る四角八面に突立難立今日を限りの死勇を震へ

バ再び羽柴の軍卒偈き立て是も同じ旗の手動り下居の方へ
引退く所を此手の戦い始ると等く後陣に控へし鈴木孫市郎良
固志摩與四郎廣賢ハ右手へ廻りて秀吉の旗本に斬て懸る羽柴家
壯勇の忠臣とる加藤虎之助清正福島市松正則片桐助作且元平
野權平長康脇坂甚内安治の輩各士鎧を上げて對戦し互に手練の
勇士カハ陰陽開閉虚々實々追つ返りつ時刻を迂し息をも継ぎ
切結びハ最も烈かりける闘戦なり這時羽柴方の先陣カハ村
掘尾ハ死力を竭し士卒を勵し血戦すれ共小密茶が勇壯當り難く隊
伍を三段に切割し人雪類小崩れて敗走すれバ二陣後陣も俱小
崩れ立きし堅陣小隊ハ羽柴勢も小密茶重幸孫市與四郎等

石山軍記三編卷之壹
の武勇の働きに懸腦され旗の手亂して騒ぎ出し既に敗軍の色
やど顯るにたり理り成哉重幸此一戦ハ勝とも負とも石山の為小
陣没究とる出陣かれバ敢て身射厭ふべき心ハなくあハ能ハ秀吉と
指違つて軍の本意を遂なんゆのと思ふ望も士の平常なるとし

繪本石山軍記第三編卷之壹 終

